

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2025
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.30 (2025. 7) ,p.96- 97
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20250701-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

鈴木 正崇

本書の要点を簡潔にまとめて批評して頂いた東野隆弘さんに御礼を申し上げます。複雑で多様性に富む各地の山々の歴史や伝承の考察をうまく紹介して頂くと共に、本書が依拠する方法論の基礎になる概念を丹念に検討して頂いたことにも感謝致します。

本書を書く契機や動機になったことが幾つかあります。第一は、2015年3月の定年に合わせて一般向け概説書として『山岳信仰』（中公新書）を刊行したことです。日本の八つの霊山、出羽三山・恐山・大峯山・立山・富士山・木曽御嶽山・石鎚山・英彦山を取り上げました。刊行以来、非常勤講師を務めた大学、早稲田大学エクステンション、朝日カルチャーセンターなどで山岳信仰や修験道について話す機会が増え、各山の見直しや他の山々についての再検討の機会が数多くありました。本書では研究の進展を踏まえて、『山岳信仰』で取り上げなかった山の歴史や伝承を深く掘り下げて検討することにしました。

第二は、2010年代の後半に開山の区切りを迎えて大規模な行事を展開した山々があったことです。2016年は勝道による日光山開山1250年、2017年は泰澄による白山開山1300年、2018年は仁聞による国東六郷山開山1300年、2018年は金蓮による伯耆大山開山1300年でそれぞれ記念行事が行われました。いずれも伝説的な開山者が未踏の山に初登拝して新たに山の聖性を開示し靈力を身につけた伝承です。開山年も明記されていますが、歴史的事実とは認め難いものです。しかし、日本各地の山々に開山伝承が伝わる以上、伝承を主軸に日本の山岳信仰を精神史として見直してはどうかと考えたのです。

第三は、日本の霊山や聖地が遺産や文化財として登録されたことです。ユネスコの世界文化遺産は2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」、2013年に「富士山―信仰と芸術の源泉」が登録され、調査研究が活性化しただけでなく、地域おこしや観光化にも大きく貢献しました。2015年からは文化庁による日本遺産の登録が始まり2000年までに104件に達し、山岳信仰関連も出羽三山・三徳山・伯耆大山・相模大山・六郷満山・葛城山・高尾山など多数に上り、歴史や伝承への関心呼び覚ましました。国史跡指定も英彦山・首羅山・宝満山、重要文化的景観にも求菩提山が加わりました。2009年にはユネスコの無形文化遺産に山伏神楽として知られる早池峯神楽が登録されています。山岳信仰に関わる各地の歴史や伝承を資源化し活用する気運が高まり、講演などでは対応を迫られました。

第四は、神仏分離と神仏習合の見直しです。2018年は明治維新以来、150年でした。明治新政府は1868年に神仏分離を断行して寺社を再編成しました。しかし、民間では廃仏毀釈に展開して、多くの寺院や仏像が破壊され、民衆の中に根づいていた神仏混淆の山岳信仰や修験道は壊滅的状况に迫られました。山岳信仰の神道化が急速に進み、江戸時代と近代の断絶が深まりました。修験道は1872年に廃止令が出され、女人結界の解除も同年に命じられました。神社神道と天皇崇拜を組み込んだ神

道イデオロギーによって日本は戦争への道を歩み出したのです。しかしながら、現代の多くの人々は神仏分離について余りよく知りません。近代史の知識も乏しい。戦後は政教分離政策を貫徹したために、学校教育で宗教について教えられることがありません。我々は江戸時代までの神仏習合や神仏融合、明治時代の神仏分離についてもっと深く知る必要があります。本書の各所で神仏分離の話が出てくるのはそのためです。日本人のこころの歴史の中に前近代・近代を貫く日本の山の精神史を据えて考えてみる。それが本書を書いた意図です。

第五は、ジェンダーの視点の導入です。2018年4月4日に舞鶴での相撲の巡業に際して土俵上で多々見良三市長が挨拶をしていた時に発作で倒れ、女性が土俵に上がって救命活動に従事しました。この時、「女性は土俵から降りて下さい」というアナウンスが流れ、いのちに関わる時に女人禁制とは何事かと相撲協会に抗議が殺到しました。女人禁制の議論は、土俵に留まらず、山の女人結界、トンネル工事、祭りでの女性の禁忌などに議論が拡大し、私のところにマスコミの取材が殺到しました。対応に応じて『女人禁制の人類学』（法蔵館、2021年）を著しました。本書でも女人禁制が強く意識されています。

時代の動きに連動して仕事をしてきました。御陰様で、2016年には日本山岳会から秩父宮記念山岳賞を頂き、女人禁制に関しては、2022年には昭和女子大学の女性文化研究賞を受賞しています。今後の課題は、山岳信仰研究を宗教学や民俗学、考古学や歴史学の枠組みから解き放ち、世相史・考現学・美術史・文化財学・現代史などと結合して多くの人の関心を惹きつける研究分野にすることです。2015年の定年後の自由な時間を活用して展開した仕事の掉尾に、本書と『山岳信仰と修験道』（春秋社、2025年）を刊行できてよかったです。忌憚なき御批評を期待しています。

（すずき まさたか 慶應義塾大学名誉教授）